香港便り その20

トラウマ的経験？ 中国のバレエ教育

文 高野 陽年 text by Yonen Takano

タンミンがスタジオに入った瞬間、中国大陸出身のダンサーが直立不動で彼女を迎えた。いつもはリラックスして迎える香港バレエの朝の光景とは打って変わり、踊りもぎこちなく、いつにない緊張感だ。だが彼女の教える内容は軽快で、僕は何が中国人ダンサーたちの動きを硬くしているのかと疑問に思っていた。

タンミンは北京でキャリアを始めた後、カナダでトップダンサーとして踊り、その後は香港バレエで2年前まで教師として指導していた。北京舞踊学校出身者が多い中国人ダンサーにとっては学校の大先輩であり、彼女の父親は中国バレエの礎を築いた方なので、タンミンの名を知らぬ中国人ダンサーはいないようだ。

しかし、ダンサーの緊張具合は、彼女が有名だからといって説明がつくものではない。むしろトラウマ的恐怖に怯える目に近かった。タンミンが特段厳しい教師かといわれると、僕のロシア時代の教師の方が数倍怖かった覚えがある。だが中国人ダンサーたちはタンミン個人というよりもタンミンのバックボーンにある中国で受けたバレエ教育への緊張感を抱いていたのだろう。

中国におけるバレエ教育はスパルタである。ロシアのバレエシステムを真似、体系化された。人口の多い中国は、ローラー作戦で身体的にバレエに適している人材を中国全土からスカウトし、中央や大都市のバレエ学校で、過酷なトレーニングを積ませた上で国立バレエ団へと送り出す。

今でも中国では古典バレエや共産党色の強いバレエが中心に上演される。そのようなバレエを上演するとき、ダンサーは個性を出すよりも、全員でミスなく、曲芸を正確に踊ることが求められる。強靭（きょうじん）で機械のようなダンサーを効率的に生み出すことができるのがロシアの流れをくむ中国式スパルタ教育なのだ。

同僚の中国人ダンサーは自分の意思でバレエを始めたわけではなく、政府に選ばれたからバレエを始めたという。香港バレエの中国人ダンサーは、自分の意思で型破りな香港バレエに移ってくるのだから、自由な表現を求めるダンサーが多いのだが、それでも過去のトラウマを引きずっている。彼らは20代後半になると自分のことを老人扱いする。中国の学校で植え付けられた完璧なイメージから少しでも肉体的に衰えると、古びた機械のように自分を扱い、芸が円熟していくという発想は持たないのだ。古典ではなくコンテンポラリーダンスなどのレパートリーになると、本来ならば余裕で踊りこなせる身体能力を持っているのに体が拒絶反応を示すダンサーもいる。身体能力的に劣る日本人の方がその辺はうまい。それはハンデを抱えても踊りへの渇望があるかないかだ。

たしかに体系化された中国バレエは強い。しかし、踊りへの探究心を育むことがさらに中国のバレエを発展させ、それがまたアジア全体を牽引していくだろうと思っている。

だから僕は同僚にもたまには肩の力を抜いてテキトーに心で踊ることをアドバイスしてあげたい。

Profile

2011年にロシアの名門ワガノワバレエアカデミーを卒業し、世界的振付家ナチョ・ドゥアトの指名を受け外国人初の正団員としてロシア国立ミハイロフスキー劇場に入団。主にドゥアト作品で活躍した後、2014年6月より世界的に絶大な人気を誇るバレリーナ、ニーナ・アナニアシヴィリに引き抜かれグルジア国立トビリシ・オペラ・バレエ劇場に移籍。ヨーロッパ、北米、日本を含めさまざまな劇場における公演で主役を務めた。そして2021年7月より香港バレエ団に活動の拠点を移し、さらに活躍の場を広げている。立教大学中退。